史料編　　2015年3月21日　松江市史講座　　鬼嶋担当

【史料1】『新生活運動優良市町村選奨調書』1957年6月30日
（2）八雲村は昭和二十六年旧岩坂、熊野両村と大庭村の一部平原地区が合併した。以来新村の建設に邁進している。この両村は、昭和二十二年に公民館を設置しており、特に社会教育に力を注いでいる。
八雲村誕生当初の議会の第一号議案が〝八雲村公民館設置並管理条例〟であったこともその一例である。
従って「村作り」は全村民の目標であり各団体の活動目標でもあるが、村をつくることは人をつくることである。ここに八雲村社会教育の基本方針は自ら明かとなり…

【史料2】『本庄公民館報』第1号　1956年10月
挨拶　館長　安達貴義
「…公民館本来の使命は地域の皆さんのあらゆる分野に於て「明るく住よい町づくり」を達成しお互に豊な経済と明るい生活を目指して郷土愛と責任感を以つて自主的な創造と企画と教養の場をつくる機関であらねばなりません。また公民館とは…端的にいえば常時地域住民の方が集つて論談したり読書したりする公民学校図書館、公会堂、集会所等の機能を兼ねた文化教養機関であると共に又文化団体の本部ともなり各種団体が相提携して地域の振興の底力を産み出す場所でもありまして之が運営につきましては地域社会の皆様の総意を反映して決めるのであります。「特に我が松江市に於ては従来の支所を廃止し新たに出張所をおかれた機会に農村地区振興対策を一段と強化し本市発展の一つの根基に培い新しい町づくりの中心機関として現在出張所が行つている連絡事務を主とした一般行政と不可分の関係において設置せられたのであります。」

【史料3】『八雲村公民館報』1953年10月10日
「頭の切りかえから　生活改善の根本問題
生活改善といつても、唯その部分に属する婚礼の改善とか、休養日の合理化、時間励行など、それらのことのみ如何に改善を叫んでみても、効果が思うように上らないのである。言い換えれば生活に対する根本の考え方を変えて行かねばならぬということである。
　終戦までの生活は封建社会の生活様式であり、これからの生活は民主社会の生活様式でなくてはならないから、如何に生活改善を叫んでも、考え方を変えなければ、どうにもならないのではなかろうか。」「生活改善と言い新生活運動と言うも、基本的な生活理念に基くべきもので、結局は民主々義の生活化である。」

【史料4】本庄青年団機関紙『あぜみち』創刊号、1956年4月15日
・「機関紙発刊によせて」（1956年4月15日）

「長い間、休刊していた本庄青年団機関紙を再刊する事になりました。機関紙などと云うと、いかにもいかめしい感じですがいろいろな団活動の広報と共に我々が日常考えている事を述べあえる、皆が自分の気持を打ちあけあえる一つの広場のようなものでありたいと思います。
本年度、本団の活動の中で、地味な、しかし最も継続的にやってゆかねばならない事は、前述の皆が気楽な気持で話し合う、日頃感じている矛盾や、或いは生活のよろこびを述べ合う―そうゆう「場」をもつ事だと思います。その中からこそ本当に地についた運動が発展してゆくと思います。…」

【史料5】本庄青年団機関紙『あぜみち』第16号、1958年5月1日
「生活から浮き上らない活動を」
「悩みや壁につき当つた仲間達の集い、これが青年団だと僕は文集でもふれました。一人一人の悩みや壁、それはみんな異つているでしょう。しかしその悩みや壁を一人だけのものとせず、皆のものとして解決するのが青年団ではないでしょうか。」「「皆で話し合う、皆で学習する」こんな雰囲気をさらに高める事が出来る様努力したいと思います。現に団運営の上にも大きな壁に当面しています。活動を活発化すればする程大きな壁に突き当り、生活から離れた活動に進み勝です。しかしあくまでも生活に根ざした団活動でなくては駄目です。そしてその中から社会の矛盾、不合理を改めるための自分を磨くことが大切だと思います。」

【史料6】「農繁期とお嫁さん」『八雲村公民館報』1958年10月10日
「昔の農家では、お嫁さんを一人の人間として迎えるのではなく、むしろ人的資源の補給といった考えから〝手間をもらう〟と云っていた」。「教育より体力」「いつもはいはい云っておれば〝よい嫁〟であるといった封建的な考え方があり、これらは今なお抜け切つているとはいえない」
「よい娘さんを農村にとどめるためには、なんといってもお嫁さんの待遇改善が先決であろう。それは別にむつかしいことではない。農村特有の嫁いびりとか、農繁期ともなれば、たとい臨月近い身重でも、それをおして野良仕事にかり立てるといった不当な酷使など改めたい。」「周囲の理解によって容易に改められる問題である。」

【史料7】「座談会　新生活運動を如何に推進するか」『八雲村公民館報』1954年3月10日
「新生活運動といいますと、従来の生活改善がやや消極的に感じられたのに対して、非常に積極的で建設的であるように感じます。そして古い因習を打ち破つて行くのには、特に老人と若い者の折り合いを良くすることが必要と思います。

【史料８】『八雲村公民館報』77号、1957年12月10日

ある主婦の手記

先日ご近所からぼたもちをいただきました。ぼたもちは八つでした。子供たちは、「早ようわけて」と、無邪気なヒトミを輝かします。私は早速盛り分けにかかりました。まずお酒のあまりいけない夫のために三つを皿にいれました。そして二人の子供にそれぞれ二つずついれ、残りの一つを私の分としました。

すると、さきほどから私の手もとをじっと見ていた五年生の長女がいきなり、「お母ちゃんのアホーアホーや」と、いつにない激しい言葉でいいました。「どないしたん？和子」私は何のことだかわからず、強い長女の視線に戸惑うばかり。長女は私の顔をにらむようにして「お母ちゃんも二つ食べたらええやないの。お父ちゃんに三つやることあらへん」とつけ加えました。

その一言は私の胸を強く刺しました。これまではこんなことは言わなかったのに、近かごろは何かと批判的になり、今も今とて、不公平なぼたもちの分配率を責めたのでした。「お母ちゃんが悪かったわ」私は娘にわびると、夫の皿からぼたもちを一つ取り、自分の皿へいれました。犠牲的精神に甘えようとした愚かな自分を、わが子の前に恥じる思いでした。（大毎　女の気持欄から）

ある中学生の作文

急に父がいなくなったとすれば私のうちは停電したように、真暗になる。今は父のいるおかげで生きているのだと思う。

父は家の宝です。大じにせねば電灯は消えてしまいます。

お母さんがお父さんに玉子を朝二つぐらい食べさせて上げられると弟達は「やあお父ちゃんはいいな」とくちぐちにいう。私が「こら」といってもやめない。あとでお母さんがよくいってきかせるけど、とてもききません。お母さんは「あんななさけないことを言ってくれるな」といいます。「お父ちゃんが死んでしまったらおまえたちは学校へいけないのだよ」といわれます。お父ちゃんはどれほどだいじなのかわかりません。（山陰新報、茶ばしら欄から）

【史料９】『八雲村公民館報』85号、1958年8月10日

〝魚のしっぽ〟主婦の手記

「きょうは、しっぽはお父さんの番よ」と長女は当然のことのように父のさらに焼魚の尾の方をのせた。「お母さんにばかり、しっぽが行って気の毒だから」といい出した。当の夫は「ありがとう」といって、そのままさらを自分の方へ引き寄せた。

私は油のよく乗った自分のさらの魚と夫のそれをくらべながら、いまにも取りかえようと動きかける自分の手をひざの上にじっと組み、いままでの自己満足的な犠牲心を捨てようと努力した。一家の主婦が健康で、いつまでも若々しくあるために…。

やがて食事がおわり、私は食後のしぶいお茶を味わいながら、私の母や祖母のかつての食卓のことを考えていた。彼女らの食卓はその労働に比例していただろうか。家族の栄養と経済を充分に考えて食卓を整える主婦は、健康であればあるほどもっと自分自身の栄養を考えねばと思う。

「自分一人の食事など、お茶づけでサラサラ食べときますの」などといわず、夫や子供のいない自分一人の昼飯も、もっと大切に考えたいものである。

魚のしっぽでも頭でも栄養には大して変りないであろうが、私は夫の好意をありがたくおいしくいただいた。（大毎、女の気持から）

【史料１０】『昭和三十六年度　公民館結婚式関係書類』本庄公民館

「御案内」

…私達の仲間である御二人の輝しい人生行路をお祝いし、御二人の暮しが明るく豊かなより幸多きコースでありますよう　お祈りすると共に、仲間で学び話し合った事を実践し、理想え一歩なりとも近づこうと努力しておる御二人の心意気を現実に現したいと存じます。

…　昭和三十七年一月十三日　　本庄結婚改善同志会

「御挨拶」

…私達はまだ多くの因習に悩むこの農村を結婚を通じて明るく豊にしようという理想は今もって変りません。今後は皆様方のお力添えと共に一人では出きなかったことを二人の力によって一歩一歩実現してゆきたい。…